

# 現代インドにおけるアパレル産業

平成 21 年入学  
カメルーンフィールドスクール参加  
調査地：デリー（インド）  
川中薫

キーワード：繊維・アパレル、北インド、労働、製品

## 自身の研究テーマについて

私の研究は、現代インドにおけるアパレル産業、特に北部における中小アパレル企業でみられる製品と生産者との関係について明らかにすることである。

インドの繊維産業は、豊富な天然素材と豊かな技術蓄積を背景にもつインドの一大産業で、そのシェアは国内工業生産額の 14%、GDP の 4%、総輸出額の 17% を占める。加えて、農業に次ぐ雇用人口を吸収し、国内経済にとって重要なセクターとなっている。なかでもアパレル産業は、2005 年の多国間繊維協定(MFA)による輸入数量制限(クォーター制)撤廃で、欧米向け輸出を大きく拡大させ、国内でも都市化と人々のライフスタイルの変化に後押しされ市場を拡大させている。国際的な競争力を持ちながら、インドのアパレル産業は、政府の政策上、小規模企業が多い。特に北インドは、ミシン 50 台ほどの小規模企業が多数ひしめき合う。

今回訪れたデリーは、北部のなかでも縫製業の盛んな都市である。インドの代表的な繊維産地、ラージャスタン州ジャイプールから、色とりどり、様々なデザインの布が送られ縫製される。デリーの縫製工は、そのほとんどが男性で、デザインの凝った婦人物の洋服を生産することが多い。一方、南インドでは、縫製工のほとんどは女性で、比較的プレーンな紳士物を手掛ける企業が多い。作り手と生産物の関係に何か相関関係はあるのか、どのようにしてインドの豊かな繊維産業は形成されてきたのかをめぐるとの研究である。

## フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールでは、東部の熱帯雨林から西部の王国まで 10 日間で可能な限りさまざまな地域を訪れ、その地をフィールドとして研究や実務に携わってこられた方々の貴重なレクチャーを受けることができた。事前講義でも聞いていたように、地域が異なれば自然環境やヒトの生活も異なり、毎日新鮮な驚きがあった。レクチャーは、椅子に座っての講義から、熱帯雨林に入って生態資源の利用をみる演習、キャッサバの栽培や利用をめぐって村全体での取り組みの様子を見学する演習など多岐にわたった。さらに本フィールドスクールでは、長い移動時間もフィールドのお話を聞くすばらしい勉強時間になった。土を巻き上げ、うねる道を延々と走るタフなジープでの移動では、植生や熱帯雨林に詳しい先生が、次々と植物の名前や利用方法を教えて下さり、熱帯雨林に入る前に多くのモノに親近感を持つことができた。さまざまな土地で暮らすヒトの生業や文化、生活様式に注目することが多かった今まで自分の視点に、モノに対する視点が加わったことが、本スクールで得られた大きな知見であると思う。

## フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか

フィールドスクールで学んだモノへの視点は、インドのアパレル産業をみる上で大きなポイントとなる。すなわち、1 枚の服はデザインが凝っていようと、プレーンなものであろうと、同じ 1 枚の服(モノ)として生産の効率性を分析してきたこれまでの研究に、服(モノ)がもつ固有性と作り手との関係という視点を加えることができると思う。これは、地域によって大きく異なるインドの多様なアパレル産業をみる上で大切な要素であると思う。

もうひとつ、フィールドスクールでは体調管理の大切さを改めて実感した。スクール期間中、風邪をひいてしまった私は、周りの方にご迷惑をかけてしまったほか、自分も思うように学ぶことができな

った。今後研究をする上でも実務をこなす上でも、健康は大切なのでしっかりと準備をして、無理をせず体調を整えていこうと思った。

## Pictures



[バカピグミーの装いスタイル]



[ボロロの家族]



[ヤウンデ市内の洋服店]



[フンバンの女性の装い]